

# 排中律に関するインド論理家の見解

中 村 元

## 一 排中律に関する自覚

排中の原理または排中律は、西洋の原名では「排除される第三者の原理」となっている。

排中の原理は思考の基的法則の一つであるか、通常は「Aは、Aでも非Aでもないものではない」という形式で表示される。換言すると、「Aと非Aとの間には、中間の第三者はあり得ない」ということである。<sup>1)</sup> 実質的・内容的には、矛盾原理を別の面から補足するものである。

これを判断の形式に適用していえば、同一の事項(主語)に関して、互いに矛盾する二つの判断は、そのいずれか一つが真であり、他は偽であり、第三の場合はあり得ない、という法則になる。すなわち、その場合には、第三の真でも偽でもない判断は成立し得ない、ということになる。

例えば、「この花は白い」「この花は白くない」という二つの判断の中間の、どちらでもない判断は成立し得ない。

排中律に関するインド論理家の見解(中 村)

しかし「この花は白い」「この花は赤い」という二つの判断のあいだには「この花は黄色い」という判断が成立し得る。

したがって、同一事項(主語)についての二つの述語が互いに矛盾概念でなければ、この排中原理は適用できない。

排中律は、実際問題として、インドの哲学者たちによって自覚されていた。(例えば、ナーガールジュナ<sup>2)</sup>。また arthabhatti の場合など。)しかし排中原理という論理的思考の一般的原则を明示することはなかった。

つづいて因明では、それは当然の原理として承認はされていたが、特別の原理として掲げられていることは無い。<sup>3)</sup> 慈恩大師は、「排除される第三者」のことを「中容の品」とか「第三」とか呼んでいる。<sup>4)</sup> 「第三」という表現は、西洋の原理に対応し、「中容の品」という表現は、明治以後の日本の論理学者たちの理解に対応している。

この排中原理は、種々の論議を呼んでいる。今日の記号論理学者のうちには、真と偽との中間に「可能である」蓋然

的である）などを置いて、排中原理を認めない主張がある。それは多値論理学の立場につながるものである。

## 二 不当概念に関する問題

しかし、多値論理学以前にも、すでに西洋において、排中原理の妥当性が疑われていた。排中原理に対する第一の非難は、この原理が認識にとつては無効であるという認識無効性の非難である。例えばヘーゲルが指摘したように、「精神は青し」と「精神は青からず」のうち、いずれか一方を真とすることはできない、というのである。

ヘーゲルなどのこの非難に対して、伝統的な形式論理学の意義を認めようとする須藤新吉教授は、批判する。

『精神』と「青色」とは、元来比較することの出来ない不等概念であつて、「心は青いか」といふ問題提出がすでに無意味なものである。この無意味を排中の原理の責任に帰着せしめることは出来ぬ。』

Aと非Aとが矛盾関係にあることは、Aという概念の適用され得る事物の範囲についてのみ言われ得ることであり、A以外の概念 (disparate concept) でもと不等概念であるものについては矛盾関係は成立し得ないということを、ディグナーがすでに気づいて、主張していた。

『古因明に云わく、その同品（同種類のもの）と活違（反対）

し、或ひは異なるを説きて異品と名づく、と。善といふ宗（証明さるべき概念）を立つるときに、不善と違害する（二反対である）が如し、故に相違（反対）と名づく、苦と樂、明と闇、冷と熱、大と小、常と無常なども一切皆爾り。要らず別に（所依の）体あてり（自ら所立の）宗に違害するを、方に異品と名づくといふ。』

以上は反対の概念を例示しているのである。

この場合には反対と矛盾とはつきりと区別していないようである。因明の典籍において「相違」というときには、普通は「矛盾」を意味する。ところがこの場合には、「反対」のことである。例えば、「冷」と「熱」とを対立させると、そのほかに「冷もなく、熱くもないものが存在し得るから、「冷」と「熱」とは矛盾関係にあるのではない。

右の実例として出ている「善」と「不善」とは矛盾関係ではないか、と考えられるかもしれないが、「不善」(akusala)とは、インド一般の表現としては「善ならざるもの」という意味ではなくて、「善と反対のもの」、つまり「悪」という意味である。だからこそ、善でも不善でもなくて「無記」なるものが場所を占め得るのである。

ところが、非Aのうちには、Aは外の不等概念をも含め得る、と古師は考えていた。

『或ひは説く、前の（主張命題において述べらるべき）所立

(論証さるべき概念)と異なることあるものを名づけて異品と為す。無常を立つるときには、(1)無常ということを証明せねばならぬときには)無常を除きて外の自余の一切の苦と無我(空)など、「縁」慮(事物の認識)と「質」礙(impenetrability)などの義を皆な異品と名づくといふが如し。』

無常を矛盾する観念は、(無常でないこと)つまり常住性ということである。ここに一例として挙げられている(外界の事物の認識)ということは、(無常)とは別な、他の概念である。しかし矛盾した概念ではない。何となれば、両者は不当概念(disparate concept)であるからである。両者は同じ次元において比較することのできないものである。

ディグナーガはこの道理に気づいていた。慈恩によると、『陳那以後は皆な「古師のごとくに」然りといふことを許さず。無常の宗の如きは、無常の無き処を即ち異品と名づく。先の古「師」には同じからず。』といって、次にディグナーガの『正理門論』の文句を引用している。

『もし「或る事項のうち」に」所立が無ならば、「その事項を」説いて異品と名づく。同品と相違し、(反対であり)、或ひは異なるには非ず。』

ここで「相違」というのは、はなはだ紛らわしいが反対の意味である。「異る」というのは、別の概念であるということである。

例えば、「冷」の反対として「熱」を考えると、両者は反対の関係にあるが、両者のどちらでもない第三の場合(中容の品)が考えられる。だから異品とは、証明さるべき概念の反対概念であってはならぬ。矛盾概念でなければならぬ。

また異品は、証明さるべき概念とは異なった他の概念ということであってはならぬ、もしもそうだとすると、ことばの(無常)ということ論証すべき場合に、無我、苦、空、事物の認識、物質の空間占有性などを(異品)と見なすことはできない。何となれば、これらの概念は(無常)に対しては不等概念であるからである。

ディグナーガや慈恩大師が漠然と気づいていたが、まだ明確には把握せず体系化していなかった二つの概念をここに確定しよう。

(一) Aと矛盾する概念。それはAと関係をもち得る範囲にある事物について成立する。「白い」に対して「白くない」は矛盾している。しかし両者は、視覚の対象に関してのみ述語され得るものである。「白い音声」「白くない音声」というような概念は成立し得ない。

(二) Aと異なった概念。A以外の概念はすべてこのうちに含まれる。例えば、「白い」に対して、「赤い」「樹木」「数」「正直」などはすべてこのうちに含まれる。いわゆるAに対する不等概念(disparate concepts)はすべてこのうちに含まれ

る。

このように理解することによって、排中原理に対するヘーゲルなどの非難をわれわれは容易に解明することができる。秋篠寺の善珠は、ディグナーガ以前の古因明における異品の概念を解釈しながら、異品を「反対のもの」と解するのにも、「異なつた、別のもの」<sup>(10)</sup>と解するのにも、いずれ誤認であるという。

『法（主張命題の述語）と相違するを立てて異品と為す。これにまた二つの解「積」あり。一にいわく、水、火の上において冷と熱と相ひ違害するの義あるがごとし。これはただ宗（主張命題の主語）に拠りて相違するを（述語として）異と為す。（理由概念）因の力の成「立」することと不成「立」とに由りて同または異となすにあらず。故に過類（誤謬）を成す。』

### 三 時間的制限の問題

排中の原理は、論理的思考の原則として形式的には正しいが、現実には適用される場合には、時間的な或る制限を受けねばならないことがある。

例えば、過去には実在したが、今は現存しない人について「かれは病氣である」と「かれは病氣でない」という二つの判断を構成して見よう。その場合には、この二つの判断は共に偽であり、排中の原理は破壊せられるように見える。この

問題はすでにアリストテレスの注目したところである。<sup>(11)</sup>

アリストテレスは、「ソクラテスは病氣でない」という否定判断のうちに、「ソクラテスは生存していない」という事実判断も論理的に内含されると考えていたのである。

このような仕方によるアリストテレスの排中原理擁護に対して須藤新吉教授はジグワルト<sup>(12)</sup>に従つて時間的に妥当する判断は、たゞその一定の時間点に於てのみ肯定を主張するものであると批判する<sup>(13)</sup>。

「ソクラテスは病氣ではない」という判断は、ソクラテスの生きていた西紀前六世紀には大きな意味をもっていたが、かれの死後の二〇世紀には全く無意義な表現であり、むしろ過去の歴史的人物としてのソクラテスの行動ないし思想は、現代から見ても、現代的意義をもつていて、異常な、あるいは陳腐なものではないという寓意的意味に解されるであろう。またかれが生存していたときにも、一生涯病氣が無かつたわけでもないであろうから、「何年何月何日におけるかれは病氣でなかつた」ということが言われ得るだけである。

そこで排中律に関しては、次の制限が設けられねばならない。時間的変化とは無関係な抽象的概念の場合には、時間的規定を無視して差支えない。しかし、時間的変化を受ける事物に関しては、特定の或る時点におけるその事物を問題とするのでなければならぬ。実在と言ひ得るものは瞬間だけであ

る、とダルマキールティは主張した。形而上学的にはそのように言い得るのであるが、論理的表現が現実性社会性もち得るためには、時点、瞬間が客観的な時間的秩序のうちにおいて特定の位置を占めるものとして表示されねばならない。このような限定を付することによってダルマキールティの主張は、現実性・社会性もち得るのである。

こういう問題点を無視したという点で、アリストテレスの排中原理の解釈は明らかに誤っている。

では、インドの論理学者たちは、この問題をどう考えたか？

インドの論理学者たちは、わたしの気づいた限りでは、過去の歴史的人物についての判断陳述の真偽を問題とすることは無かった。「ソクラテスは病気ではない」に対応して、「チャンドラグプタ大王は病気ではない」というような判断の真偽を問題とすることは、かつて無かった。論理学者が問題としたのは、Devadatta であるとか、Ditha であるとか、過去・現在・未来にわたる歴史性を超越した人物である。超歴史的性格というのは、インドの思维の顕著な特徴であるが、論理学をさえも規定している。

論理学は普遍的学問であるはずであるが、それが体系を構成するや否や、歴史的風土的社会的特性に制約されるのである、その事態は、この点にも認められる。

排中律に関するインド論理家の見解（中 村）

では、「ソクラテスは病気ではない」、インド的に言い直せば、「チャンドラグプタ大王は病気ではない」という判断は、インドの論理学の立場ではどうなるのであろうか。

アリストテレス論理学による限り、過去の歴史的人物に関するこのような判断は真である。しかしディグナーガ以後の論理学者たちによると、「Aか、非Aか」という排中律の適用されない、別の領域に属する事項の存在であるから、真でも、偽でもない、ということになる。

この点から考えると、記号論理学は、アリストテレス的思维を受けていて、これに対して、ディグナーガたちは、矛盾律、排中律などの適用される場を考えていたことになる。

さて排中原理をこのように理解することによって、九句因のうちの第五句の問題を容易に説明することができる。九句因それぞれについての真偽の判定は、形式論理学によるうとも、記号論理学によるうとも、因明によるうとも、すべて同じであり、また同じであるべきであるが、第五句（5）に関してだけ異なって来るのである。

#### 四 数量的制限の問題

排中の原理に対して加えられる第三の非難は、判断の主語について数量的制限を明示しなければ、排中の原理は適用され得ないということである。（排中の原理に対する数量的制

限性」ということは、クルーグ<sup>(16)</sup>によって始めてなされた非難であるという。

これは言語表現上の問題である。インド・ヨーロッパ諸語においても、シナ語・日本語においても、一つの判断を明示する場合に言語が全称であるか、特称であるか、あるいは個物であるか、ということは明示しない場合がある。

「人は死ぬものである。」

「ことばは無常である」(amityah sabdah)

という場合には、全称であるが、

「まあ、色の美しいこと！」

という場合には、眼前に見ている特定の物の色が美しいことを意味している。それは、判断の含む概念の意義内容、それを表わす言語表現のニュアンスによって、全称か特称か、あるいは個物を主語としているかを理解することができる。いずれであるかを決定しがたいときには、数量的制限を明示しなければならぬ。

排中の原理を独立の項目として論じていることもないし、また索引にも出ていない。

4 基『因明入正理論疏』卷上末(大正蔵、四四号一〇五ページ下)、中村『因明入正理論疏』国訳、九四ページ。

5 Hegel: *Encyclopaedie*, § 119. 須藤、前掲書、四四項。

6 須藤、前掲書、四四項。

7 『因明入正理論疏』上末前掲書、一〇五ページ下、国訳、九三ページ。

三ページ。

8 注(6)に同じ。

9 字井伯寿『印度哲学研究』第五卷五八二ページ。

10 異品の「異」が別異の意味ではないということについては、

村上境界『仏教論理学』一二八ページ以下参照。

11 善珠『因明論疏明燈抄』第二末(大正蔵、六八卷二七四ページ上)なお善珠は「有法と異なるもの」を異品となす説を批判しているが、これは異品の説明としては不要であるから、こ

こではその検討を省略する。

12 *Category* 13 b. 岩波版『アリストテレス全集』第一卷四九一—五〇二頁。

一五〇二頁。

13 Sigwart: *Logik* 209.

14 須藤、前掲書、四五項。

15 『正理門論』(字井『印度哲学研究』第五卷五八九ページ以下)

16 Krug: *Denklehre* § 19. 須藤、前掲書、四六項、九一ページ。

(東方学院院长・文博)

1 排中の原理は、他の諸入思考の原理と同様に、アリストテレスによって確立された。須藤新吉『論理学綱要』(内田老鶴圃、昭和二四年)四三項(八七—八八ページ)

2 *na ca gatagata vyatikreṣa tritīyam aparām adhvajātam paśyāno ganyamānaṃ nāma.* (*Mādhyamakavṛtti*, p. 93, l. 7)

3 名著 Th. Steinhilber: *Buddhist Logic*, 2 vols. に *na ca gatagata*